

4月7日(火)まで

「漆芸の精華 —江戸時代を中心に—」

古来から日本人の生活と密接な漆。漆を用いた装飾方法は、蒔絵(まきえ)や螺鈿(らでん)、彫漆(ちようしつ)など極めて多彩で、特に江戸時代にはその技法が多様に展開しました。本展では漆で彩られた、調度、楽器、刀装、馬具など、多岐にわたる漆芸品を井伊家伝来品から紹介します。

4月10日(金)~5月10日(日)

「国宝・彦根屏風」

近世初期風俗画の傑作、国宝・彦根屏風を特別公開します。



▲風俗図(彦根屏風)

▶ギャラリートーク

4月11日(土) 11:00~11:30、14:00~14:30

解説:当館学芸員 事前申込:不要 場所:講堂 ※観覧料が必要

常設展示の名品

常設展示「ほんものとの出会い」では、譜代大名筆頭・井伊家に伝来した名宝を中心に80点あまりを展示しています。

「ほんものとの出会い」

5月10日(日)まで

朱漆塗紺糸威縫延腰取二枚胴具足

兜(かぶと)に天衝脇立(てんつきわきだて)と菖蒲(しょうぶ)の葉を象った前立(まえだて)を表し、肩や胴の防具には大袖(おおそで)や総角(あけまき)を取り入れるなど、歴代甲冑(かっちゅう)の中で最も華やかな1領です。井伊家8代直定(なおさだ)の所用と伝えます。



▲朱漆塗紺糸威縫延腰取二枚胴

- 4月の休館日はありません
- 4月7日(火)~同9日(木)は、展示替えのため一部休室します。

チケット情報

ひこね市文化プラザ

5月6日(水・振) 14:00 エコーホール

第11回エコーホールピアノメンバー演奏会
ア・ピアチェーレ!

自由 【入場整理券配布中】入場無料(要入場整理券)

7月5日(日) 10:15/13:00 メッセホール

ベビーといっしょに
コンサート2020

出演:高木充江(うた)
山本哲子(うた)
今堀智子(ピアノ)
森有子(カラス)



自由 【発売中】

一般 500円
友の会 450円
※大人1人につき未就学児2人まで無料

申込・お問い合わせ先 チケットセンター

☎27-5200 (9:00~19:00)

チケットはインターネットでも購入いただけます。https://bunpla.jp/

4月の休館日 6日(月)、13日(月)、20日(月)、27日(月)

【ひこね市文化プラザ各公演 発売初日の予約の取り扱い】

- ※電話予約・インターネット予約のみの受付となります。
- ※窓口でのチケット引き取り・販売は開館日から承ります。
- ◎表記の価格は全て税込価格です。
- ◎入場制限のある公演は、託児サービスを実施します。子ども1人1,000円。各ホールまで事前予約が必要です。

6月14日(日) 14:30 メッセホール

ひこね市民大学特別講座
心をほぐすストレッチ~やわらかく生きてみませんか?~

自由 【入場整理券配布中】
入場無料(要入場整理券)

「それいけ!アンパンマン」の「パタコさん」役や、映画「魔女の宅急便」の「黒猫ジジ」役を務めた実力派声優・佐久間レイによる講演や、佐田詠夢を伴奏に迎えコンサートや手遊び・朗読劇をお届けします。



佐久間レイ 佐田詠夢

6月27日(土) 14:00 メッセホール

ひこね市民大学特別講座 田中ウルヴェ京講演会
「トッパアスリートに学ぶ
ストレスをやる気に変える方法」

自由 【4月5日(日)9:00~予約開始】
一般1,000円、友の会800円
※未就学児は入場いただけません

※2020年3月15日の振替講演となります。ホールの変更に伴い自由席に変わっております。ご了承ください。



みずほ文化センター

4月の休館日 7日(火)、14日(火)、21日(火)、28日(火)、30日(木)

お問い合わせ先 みずほ文化センター
☎43-8111 (9:00~17:00)

とまきの玉手箱

博物館からのメッセージ

ある足軽家族の幕末 —彦根と京都の間で交わされた手紙—

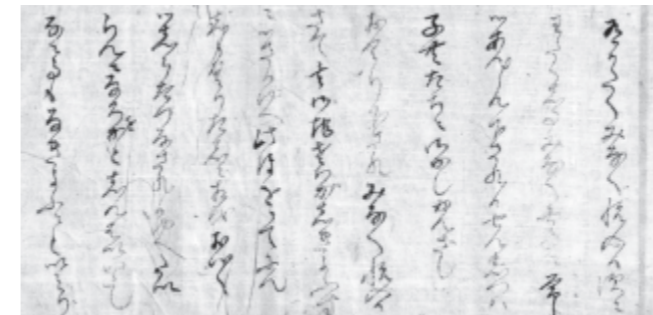
井伊直弼が亡くなってから2年後の文久2年(1862)に彦根藩は従来からの京都守護の役目を幕府から解かれたものの、元治元年(1864)以降、慶応4年(1868)の鳥羽伏見の戦いに至るまで、度々京都の守衛を命じられ、藩兵を京都に駐留させていました。

この時期に藩兵の一人として京都に居た足軽北川文太と、彦根の父母との間で交わされた手紙が、北川文太家文書(金当館蔵)に伝わっています。時代が大きく転回していく幕末の時期、この家族がどのように過ごしたのかを、これらの手紙から見えてきます。

北川文太は、文久2年にわずか11歳で家を継ぎ、善利橋三丁目(現彦根一丁目)に屋敷を拝領していました。京都に赴いた文太は、手紙で父文太夫と母おとせや、親類に近況を知らせ、時には八橋などの菓子や簪などを送っています。また、服の仕立て直しや、京都で高値になっている紙を彦根か

ら送る事を依頼することもありました。ある年の6月13日に母おとせに宛てた手紙の中で、文太は次のように述べています。「こちら京都も祇園祭なので参詣したけれども、時節が悪いので、さびしい事でした。彦根の事を夢に見るくらい羨ましく思います。酒も5日に1回くらいしか当たりません。ここでは、政情不安で市中の活気に欠く京都の様子を伝えるとともに、彦根を懐かしく思う気持ちと、現状への不満を漏らしています。文面からは10代半ばの文太が母親に甘えているようにも感じられます。父文太夫から文太への手紙では、鮎寿しや、鮎の煮付け、柿など、故郷の食べ物

を



▶慶応3年(1867)おとせ書状(北川文太家文書 部分)

送ったことを知らせるものが多くあり、また、手習いに励むようにも書き送っています。鳥羽伏見の戦いの前の慶応3年の手紙では、「万一大乱になった時には、戦場から逃げ出さない様に口頃から心得ておく」と、戦場に対する武士の心構えを説いています。

父文太夫からの手紙が父の威厳が表に出たものであるのに対し、母おとせからの手紙は、息子文太への愛情がより直接に表れています(写真)。文太夫に内緒で文太へ金子を2両も送金したこともあり、戦争前の慶応3年の手紙では、「京都は騒がしい様子で、彦根藩から兵を出されるので、大乱になるうかがい心配だし、何事もなきように祈って

いる」と書き送っています。出兵している我が子の無事を祈る母親の気持ちが切に伝わってきます。この後、同4年に戊辰戦争が起り、彦根藩は明治新政府軍に属し、旧幕府軍と戦いました。北川文太がこの戦争でどう行動したかは今のところ判明しませんが、明治4年(1871)の彦根藩士の戸籍簿に名前が確認できますので、戦争を生き延びたことは確かです。

父・母と息子の間で交わされた手紙からは、互いに思いやる家族の様子うかがえます。一方で、それらの人びとが否応なく戦争に巻き込まれていく時に感じた不安な気持ちもそこから読み取ることが出来ます。【彦根城博物館学芸員 渡辺恒一】